

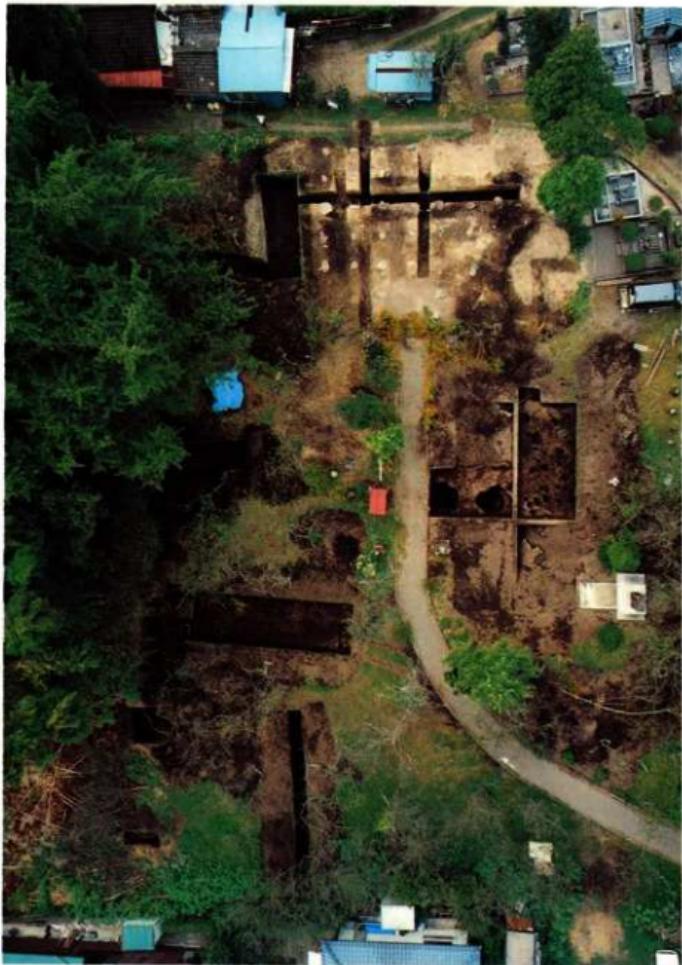
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集

遺跡所在確認調査に伴う
市内遺跡発掘調査概要報告書 I

日向国分寺跡

1996・3

宮崎県・西都市教育委員会



日向国分寺跡調査区全景



堀込地業(推定金堂跡)検出状況



1号・2号土坑検出状況

序

西都市教育委員会では、国庫補助を受けて、新堂宇建設及び伽藍配置確認に伴う市内遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査結果の概要報告であります。

今回の調査では、金堂のものと推定される掘込地業跡に加え、その金堂を中心に巡らされていたと推定される回廊のピット列、さらには、回廊の外側に巡らされていたと思われる溝状造構など、今まで明確にできなかった主要伽藍配置の一部分が確認されました。

また、これらの造構に伴い土師器をはじめ軒平瓦・軒丸瓦を含む多量の平瓦・丸瓦などが多量に出土し、さらに、基壇下層からは皇朝十二錢最後の鋳造となった「乾元大寶」など貴重な遺物も出土しました。

いずれにしても、これら造構及び遺物は、日向国分寺跡解明のためには極めて重要なものであり、大きな成果をあげることができました。

本報告が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導員の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成8年3月29日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が図庫補助を受けて、平成7年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査及び図面作成等については養方政幾・岩田陽子が行った。
4. 本書の執筆は、第Ⅰ章～第Ⅳ章を養方が、第Ⅴ章を日高正晴が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北である。
6. 調査で出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館において保管している。

目　　次

第Ⅰ章. 序説.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の体制.....	1
第Ⅱ章. 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
第Ⅲ章. 調査の概要.....	4
第Ⅳ章. 遺構と遺物.....	9
第Ⅴ章. 小結.....	15
図　版.....	17
報告書抄録.....	21

第Ⅰ章. 序 説

1. 調査に至る経緯

日向国分寺跡には、江戸時代寛政年間（1789～1801）異端の放浪者と呼ばれた行脚僧の木喰上人によって作造された五智如来座像を安置するための堂宇（五智堂）が建てられていたが、すでに、築後49年が経過しており、風雨や台風などの影響を受け、老朽化が著しいことから、本年度新堂宇の建築が計画されることとなった。

この旧堂宇が建てられていた場所は、国分寺域内でも一段高い部分で、基壇あるいは土壇と言わわれているところである。この基壇は、現状から、なんらかの建物を建てるために構築された遺構であることは確かであり、新堂宇の建築予定地にもなっていることから、基壇の残存状況及び構築年代・性格などを把握するための調査を実施した。

また、日向国分寺跡は、昭和23年に日向考古調査団、昭和36年・平成元年度に県教育委員会にて確認調査が実施されているが、僧房跡（平成元年度）と推定される遺構以外、その主要伽藍配置については明確にされておらず、さらに、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化は著しく、畑地や空き地の確保も困難であることから、伽藍配置の確認が急務であり、本年度は県指定地を含めた公有地内での確認調査を国庫補助を受けて行った。

なお、調査は当初計画では区画整理事業等に伴う遺跡所在確認も実施する予定であったが、区画整理事業の実施が延期され、条件的に調査の進行が困難になったことなどから、日向国分寺跡にしほって実施することとなった。

2. 調査の体制

調査主体 西都市教育委員会

教 育 長 平 野 平

社会教育課長 三 輪 公 洋

同文化財係長 伊 達 博 敏

同文化財主事補 鹿 嶋 修 一

調査員 社会教育課主事 養 方 政 幾

同 主 事 補 岩 田 陽 子

調査指導員 日 高 正 晴 (西都原古墳研究所長)

柳 沢 一 男 (宮崎大学教育学部助教授)

第Ⅱ章. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50~80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡式を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡西都原古墳群が所在し、また、南九州独特の埋葬形態を有する地下式墳も12基確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって岬様に細長く延びた洪積世台地で、その南端には由緒ある三宅神社が創建されている。

その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野部へとつながっている。

日向国分寺跡は、その中間台地の北方、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷地形に挟まれた地域に位置している。そして、北方600m程の妻高等学校敷地には同尼寺跡も保存されており、本地域は歴史的にも価値の高い、重要な地域となっている。

また、国分両寺は、国府の近くに置かれるのが全国的な通例であったことから、日向国分寺から推定すると、日向国府は近い位置に所在したと思われる。しかし、現在推定地となっている地域を平成元年度に県及び市教育委員会で試掘調査を行ったが、わずかの布目瓦のみしか検出できなかった。よって、結果的には、弥生時代を中心とした集落跡が確認され、また、前方後円墳5基を含む古墳20基（特別史跡・西都原古墳群）も所在していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡地帯として位置づけられる。

この日向国府については、現推定地（上尾筋地区）の他、右松地区及び寺崎・法元地区など幾つかの候補地があげられているが、昭和63年度から県教育委員会により実施されている国衙・群衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査及び範囲確認調査や市教育委員会による遺跡所在確認調査によって、多量の布目瓦に加え回廊と推定される遺構や掘立柱建物跡などが寺崎・法元地区より検出されていることから、本地域が日向国府の有力な候補地として浮上してきた。

さらに、昭和63年度の平田・童子丸新道路建設に伴う発掘調査においては、古墳時代中期中葉から後葉、つまり、男狹穗塚・女狹穗塚が築造された時期頃の集落跡が検出されており、西都原台地上はもちろん、日向国分両寺跡を含む中間台地は、古代日向国の中心的な役割を果たしてきた、歴史的な環境を持つ地域であったということができる。



- | | | |
|------------|-------------------|-----------|
| 1. 西都原古墳群 | 2. 御陵墓（男狹穗塚・女狹穗塚） | 3. 丸山遺跡 |
| 4. 新立遺跡 | 5. 寺原第1遺跡 | 6. 原口第2遺跡 |
| 8. 日向國分尼寺跡 | 9. 酒元遺跡 | 10. 寺崎遺跡 |
| | | 11. 松本遺跡 |

第Ⅲ章. 調査の概要

日向国分寺跡については、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については、資料不足で明示できないが、昭和36年については、旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度については寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。

昭和23年及び昭和36年の調査では、伽藍配置などについては明確にされていないが、平成元年度の調査では僧房跡と想定される掘立柱建物跡などが検出された。

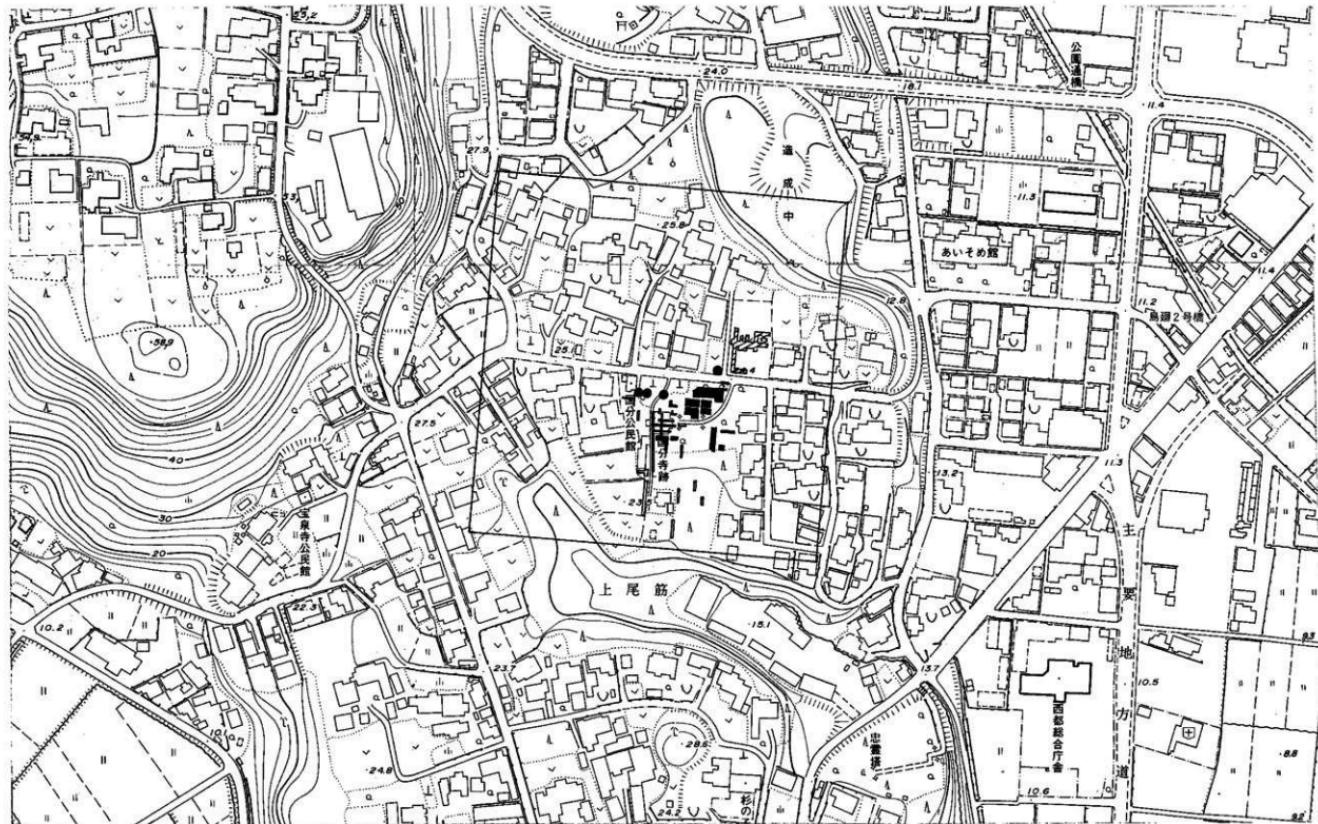
今回の調査は、新堂宇の建築地の選定も含まれており、昭和36年の調査部分と重複するところもあるが、五智堂が建てられていた基壇部分とその東側を中心にトレンチを設定して行った。また、調査区を基壇周辺をA区、その東側の北半分をB区、南側半分をC区として調査を行った。

調査の結果、基壇については建物の基礎のために掘込まれたいくつかの並行したピットが検出され、旧堂宇を合わせると少なくとも2～3回は建て替えられていたことが確認できた。構築年代については、基壇内より遺物が出土せず判断がつかないが、年代がわかるもので基壇下層より皇朝十二錢の最後になる「乾元大寶」（958年鋳造・987年通用を全禁止）が出土していることから、10世紀以降の所産であることはまちがいないと思われる。

その他、B区からは長軸2mを越す大型の梢円形状土坑、A区・C区の南側・B区の東側から溝状遺構、B区・C区から並行したピット列、A区北側から掘込地業の南東隅などが検出されたが、ピット列は回廊跡、溝状遺構はその外側に巡らされていた溝、掘込地業跡は金堂のものであると考察される。

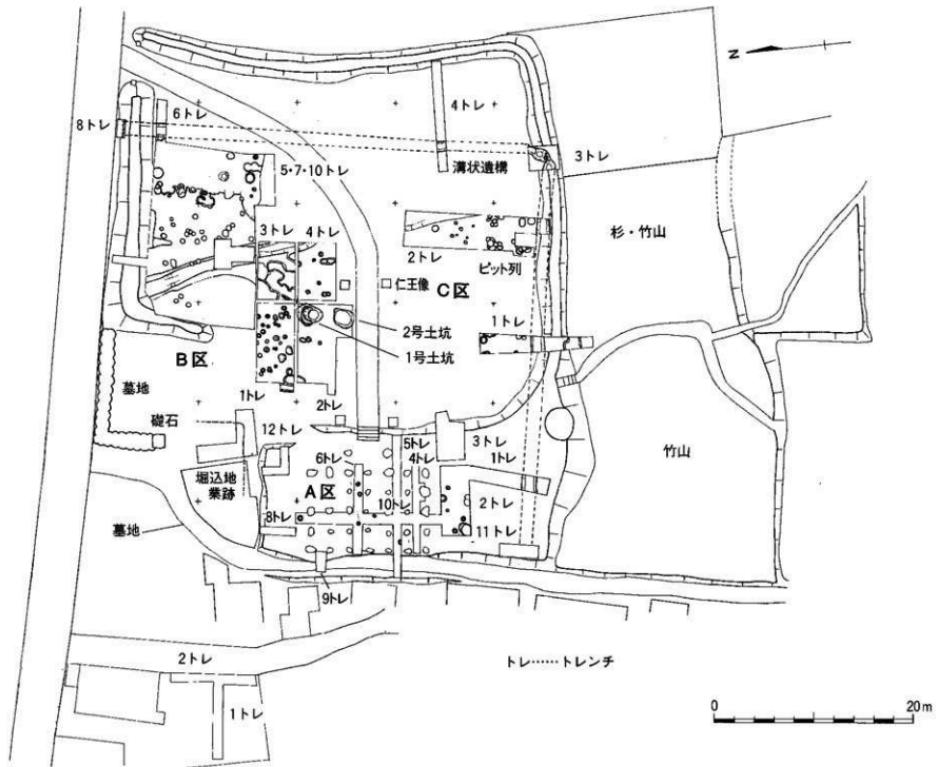
このように、今回の調査で、今まで明確でなかった主要伽藍配置に関する遺構が検出され、一部分ではあるが、伽藍配置の特定ができたことは大きな成果であった。

なお、新堂宇建築地については、このように重要遺構が検出されたことから、この遺構を除外する地域で検討したが、最終的には除外した地域では建設が不可能との結論であった。よって、将来整備のときは、移動する条件で、遺構に影響の最も少ないB区東側に建築されることとなった。



第2図 日向国分寺跡周辺及びトレーンチ設定図

■ ~ 平成7年度調査
 □ ~ 昭和36年調査
 □ ~ 平成元年度(県教育委員会)調査
 ● ~ 碑石



第3図 検出構造分布図($S=1/400$)

第IV章. 遺構と遺物

1. 遺構

《基壇》

旧堂宇、いわゆる五智堂が建てられていたところで南北約19m、東西約14m、中央厚さ0.6mの規模を有し、端部は傾斜している。断面は版築状を呈しているところもあるが、全体的には雑で、多量の礫及び小石を含んでいる。

遺構は、第2トレンチにて東西4個のピット列、第4・5トレンチにて1間×2間の礎石の地固め用

の掘込みが検出された。第2トレンチのピットは径0.65m前後(アカホヤ火山灰層面)、第4・5トレンチの掘込みは径1.5m前後・深さ1.0m前後を計る。いずれも、基壇と同じ埋土である。このようなことから、この基壇が構築されてから、少なくとも2~3回は建て替えられているが、遺物が、全く出土しておらず、時代的なことは不明である。



基壇近景



基壇(A区・2トレ)調査状況



基壇検出状況

《土坑》

B区の南側中央より大型の土坑が南北に2基検出された。1号は、長軸2.6m・短軸2.2m・深さ1.53m、2号は、長軸2.1m・短軸1.65m・深さ1.4mの規模を有する楕円形状のものである。この土坑については、轆轤支柱との指摘もあるが、位置及び方向などを考慮すると、轆轤支柱とは考えにくいという



2号土坑

意見もあることから現段階では瓦溜りとして取り扱うこととした。なお、幢竿支柱とは、寺院や宮殿などにたてられた旗や幢（ほん）を支えた支柱で、2本の柱を鳥居状に組み合わせ、その中央部に竿を立てたものである。

土坑内より唐草文で格子目叩きを有する軒平瓦をはじめ多量の丸瓦及び平瓦、高台付椀や壺などの土師器が出土した。

《掘込地業跡及び版築状遺構》

A区第12トレンチより金堂の掘込地業跡と推定される掘込みが確認された。南東隅にあたる部分でアカホヤ火山灰層面での検出である。

版築は、難ではあるが、固くしまっており、礎石の掘込みも確認される。端部は傾斜している。またこの版築は、国分公民館の南D区第1・2トレンチからも確認されることから、基壇北側の墓地部分に金堂が想定される。A区第12トレンチからD区第1トレンチまでの距離は約30㍍、掘込地業の深さ0.3㍍前後を計る。



堀込地業検出状況



ピット列検出状況

《ピット及びピット群》

ピットは、各トレンチより検出されているが、ほとんど後世のものであると考えられる。これらは、何度か建て替えられたことを物語っているが、掘立柱建物跡は確認できなかった。

このなかで、注目されるのは、B区東側及びC区南側から検出された並行のピット列である。並行幅3.0㍍、東西（C区）あるいは南北（B区）に3.0㍍間隔に対し延びている。ピットはすべて円形で、径0.4~0.72㍍を計る。このピット列は、検出された位置や状況などから、回廊跡のものであると考察される。



ピット列及びピット群（C区・10トレ）検出状況

《溝状造構》

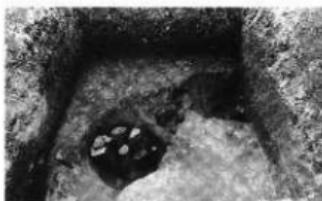
A区の南側第1・11トレンチ、C区の南側第1～3トレンチ・東側第4トレンチ、B区の東側第5・9トレンチから検出されている。これを線で結ぶとA区第11トレンチからC区第3トレンチまで直線的に延び、そこから直角に曲がりB区第8トレンチまで延びている。現存長南辺約40m、東辺約42m、幅0.9～1.5m、深さ1.7m～2.8mを計る。

溝状造構内からは、唐草文の格子目叩きの軒平瓦をはじめ縄目・格子目叩きの平瓦・丸瓦及び高台付



溝状造構内(C区・4トレ)瓦出土状況

椀や壺などの土師器が出土している。



溝状造構(C区・3トレ)検出状況



溝状造構(C区・4トレ)検出状況

2. 遺 物

遺物は軒丸瓦・軒平瓦や平瓦・丸瓦などの瓦をはじめ土師器・青磁・陶磁器・須恵器・石器・古鏡が出土している。総数では、約9,400点にものぼるが、もっとも多いのが瓦で全体の93%を占める8,800点が出土している。

瓦は、そのほとんどが平瓦と丸瓦で、わずかに混在して軒丸瓦と軒平瓦が出土している。

軒丸瓦は、單弁蓮華文をはじめ複弁蓮華文のものが出土しているが、量的には少なく、巴文などの中世以降のものも含まれている。1は外区内縁から内区中房の破片で、蓮弁が3葉遺存している。また、外区内縁には珠文が2個、内区中房には蓮子が2個確認される。2は外区のない内区のみの形式のもので、蓮弁が2葉と内区中房に蓮子が2個遺存している。3は内区のみで、蓮弁が4葉と内区中房に蓮子が1+3(4)+4(8)の計8個が遺存している。4は外区が剥落したので、蓮弁が4葉遺存している。5は外区外縁が剥落したもので、内区には蓮弁が3葉遺存している。また、凸面に布目痕を残す。6は唯一複弁のもので、外区

外縁から内区の破片であり、蓮弁が4葉遺存している。

軒平瓦も量的には少なく、中近世のものも含まれている。7・8いずれも溝状遺構内から出土したもので、7は全体のほぼ1/2が遺存している。界線から内区のみ施されているもので、内区には均整唐草文を有している。凸面は正格子目叩きで、瓦当部には赤色顔料が付着している。凹面には布目痕を残す。9は脇区から内区の小破片であるが、脇区に珠文ではなく、界線内に唐草文が施されている。叩き及び調整等は不明である。

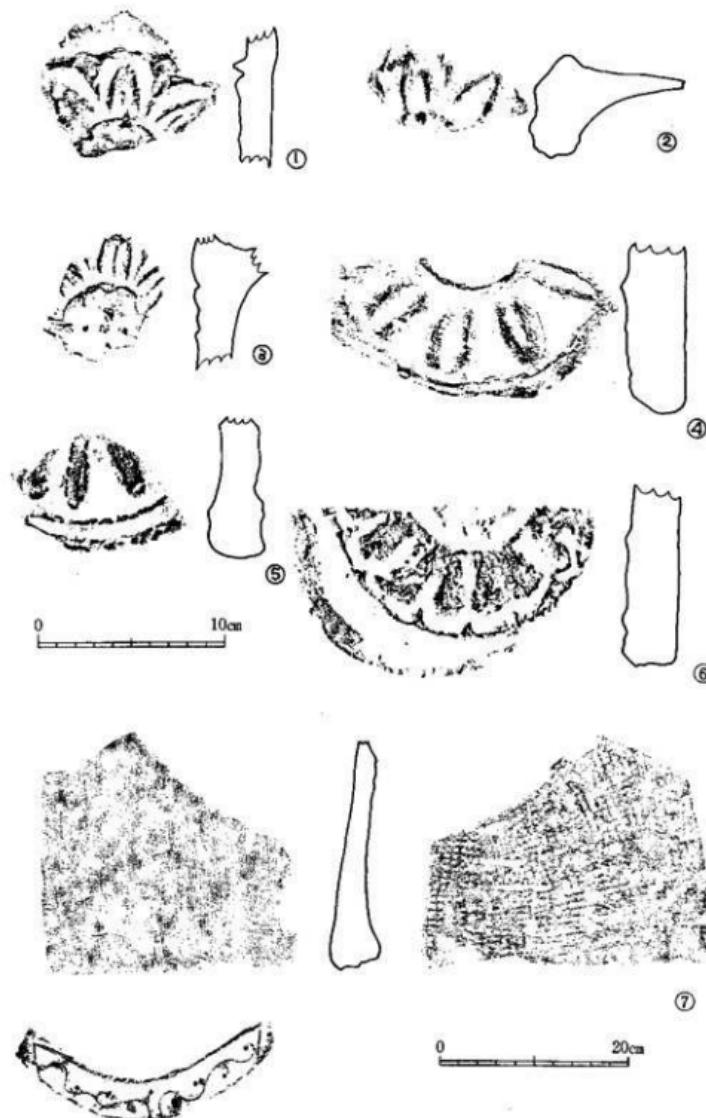
平瓦及び丸瓦も同様、中近世のものが多く含まれているが、凸面の叩きと凹面の調整などによっていくつかに分類される。大きく凸面の叩きは格子目叩き・繩目叩き・平行叩に分けられる。さらに、細分すると、格子目叩きは正格子目叩き・長方形格子目叩き・斜格子目叩きに、繩目叩きが横位のものと縦位のものに分かれる。その他、叩き板によるナデ調整のものなども含まれているが、圧倒的に繩目叩きのものが多い。繩目叩きの横位と縦位の割合はほぼ5:5で、いずれも粗繩目の叩きのものと精繩目叩きのものがあるが、縦位のものは、わりに精繩目叩きのものが多く、丁寧な仕上がりになっている。9は横位の粗繩目叩きのもので、ほぼ完形である。凹面には叩き板によるナデ調整が施され、わずかに布目痕を残す。

土師器は溝状遺構をはじめB区の土坑などから壺・高台付椀等が出土している。壺はヘラ切り底のものがほとんどであるが、糸切り底のものも見受けられる。平底に直線的に開く体部がつくタイプのもので、底部と体部の境が明瞭なものや段をもつものなどが含まれる。高台付椀は脚の短いタイプのものが多く、垂直及び外方向に広いている。今回は県教育委員会の遺跡詳細分布調査の際出土した、長脚状の高台がつくタイプのものは見受けられなかった。須恵器は、量的にもわずかで、しかも小片であることから判断しにくいが、高台付椀や壺などの破片と思われる。

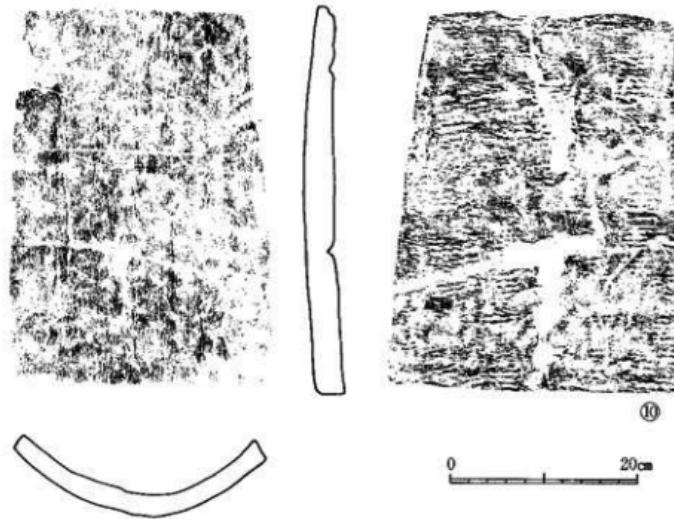
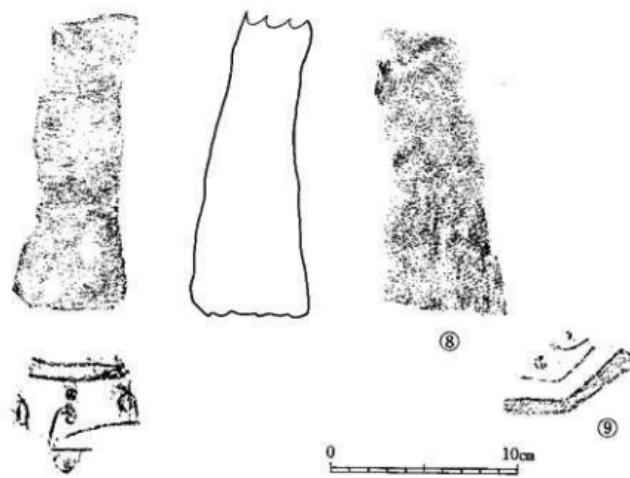
陶磁器は青磁・白磁などの輸入陶磁器をはじめ、染付・擂鉢などが出土した。

古銭は、寛永通宝に加え、非常に興味あるものが出土している。それは、基壇下層から出土した「乾元大寶」で、10枚程が鉢に入っている。この「乾元大寶」は、皇朝十二銭最後のもので、天徳2年(958年)から鋳造されている。しかし、完全な鉛銭であったことから非難がわき、鋳造してわずか5年で生産が停止されている。しかも、永延元年には、破銭も多いことから通用が全く禁止され、仏事のみ使用されていたようである。いずれにしても、県内ではじめての出土例であり、国分寺跡ならではという貴重な資料である。また、「乾元大寶」が出土したことで、基壇は10世紀以降に築上されたことが判明し、少なくとも基壇が創建時のものではないことが確認された。

その他、有肩打製石斧や石錘などの石器が出土しているが、本地域が古い時代から生活が営まれていたことを示す資料となった。



第4図 日向国分寺跡出土瓦実測図(1) ($S = 1 \sim 6 \rightarrow 1/3 \cdot 7 \rightarrow 1/6$)



第5図 日向国分寺跡出土瓦実測図(2) (S = 8・9→1/3・10→1/6)

第V章. 小 結

日 高 正 晴

このたび、木喰上人作の五智如来像を安置している五智堂が、新築されることになり、その堂宇が建っていた基壇について、構築年代などを確認するための発掘調査が行われたが、それに関連して県指定地の日向国分寺跡地についても調査を進めた。

さて、この日向国分寺跡については、昭和23年（1948）4月、日向考古調査団によって寺域の調査が行われたが、さらに、昭和36年（1961）12月には、県教育委員会によって国分寺跡の伽藍配置などについての発掘調査が実施された。

前者の調査は、東京大学文学部駒井和愛助教授を団長としたが、日向国分寺跡については、主として早稲田大学があたり、また、後者の調査は、齊藤忠博士および九州大学教授鏡山猛氏らを中心に行われた。

なお、筆者は、この両調査ともに調査員として参加したので、以下、その時の調査に関しての主要なことについて述べてみたいと思う。

まず最初に、日向考古調査団による日向国分寺跡の寺域調査についてであるが、その寺域の考察においては、国分寺の南限・北限・東限・西限の位置を確認することであった。

その中でも、東限は、市街地の方から坂を上り詰めた所に、古く仁王石佛が立っていた東門が存在したという伝承が残っており、そして、その東門推定地から南の方へ直線を引いた線が寺域の東限と推定された。そして、その線引の所に小円墳が2基存在しているので、その古墳を除外した内側を寺域の東限とみなした。

また、南限は、五智堂の直ぐ背後を南北に走っていた小路を日向国分寺の南北中心線の名残りとみなした場合、その南端の地区が古道路と結ばれ、しかもその地区が踊り場状になっていることから、この地点を南大門地区と想定し、ここを南限と想定した。

そして、坂を上り詰めた所から西の方へ直線に通った東西道路については、道幅は、狭かったと思われるけれども、寺域の中央部を東西に走っていた古い道路と推測される。

なお、寺城の西南隅の地溝帯の西側台地上からも布目瓦が出土するので、西限は、この地区まで及ぶことになる。そして北限は、国分集落の北端地とすると、寺域は、ほぼ2町四方と推定することができた。

次に、昭和36年の国分寺調査の際は、昭和23年の調査結果に基づいて、一応、2町四方の寺域推定のもとに発掘調査が進められた。そして、南大門想定地一帯および中門と想定される地区で、それぞれ数本のトレンチを入れて調査したけれど遺構の確認をつかむことはでき

なかった。

それでは、このたびの国分寺跡発掘調査の結果について述べてみたい。まず、五智堂の建っていた基壇の発掘調査を行ったが、基壇内からは全く遺物が出土しなかった。しかし、下層部において、律令時代に使用された皇朝十二銭の最後の銅錢である「乾元大寶」(けんげんたいほう)一天德2年(958)铸造一が出土したことにより、この基壇は、10世紀以降の遺構であることが確認できた。

それから、この「乾元大寶」であるが、この銅錢は、周防国(山口市銅錢司)で铸造されたものであるから日向國にも豊後水道を通じてもたらされたものであろう。

次に、関心をそそがれることは、A区の南側、B区の東側、それにC区の南側などの地域に直線の溝状遺構が確認されたことである。その長さは、南北約140m、東西約42mあり、しかも、その溝状遺構内からは唐草文の格子目叩きの軒平瓦、縁目・格子目叩きの平瓦・丸瓦なども出土している。

さらに興味あることは、その溝状遺構のすぐ内側のB区東側およびC区南側から検出された並行のピット列である。その並行幅は3mあって、東西(C区)：南北(B区)に溝状遺構とともに確認できる。それで、このピット列遺構は伽藍配置の上からみて回廊跡と推定することができる。そして、最後に最も注目すべきことは、A区12トレンチで、金堂関係の遺構と推定される版築状遺構など的一部分が認められたことである。現在、この地区に、3箇の礎石が現存していることからも、さらに検討を加える必要がある。

以上、論述したように、今回の日向国分寺跡の発掘調査においては、国分寺の伽藍配置を考究してゆく上で極めて貴重な回廊および金堂の配置につき有力な手掛りを得たことで有意義な調査であったと思われる。

なお、伽藍配置で存在が明らかでない塔址についても、C区の南側、雜木林の中に、方形状土壇跡と想定できるような場所も存在しているので、今後、さらに調査を進めなければならない。

註

(1) 松 本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I

日本考古学協会編纂 昭和23年度

(2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺跡」日向遺跡総合調査報告第3号

昭和38年3月

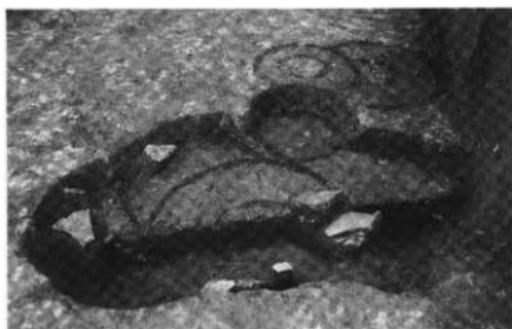
図 版



1号・2号土坑(B区2トレ)遺物出土状況

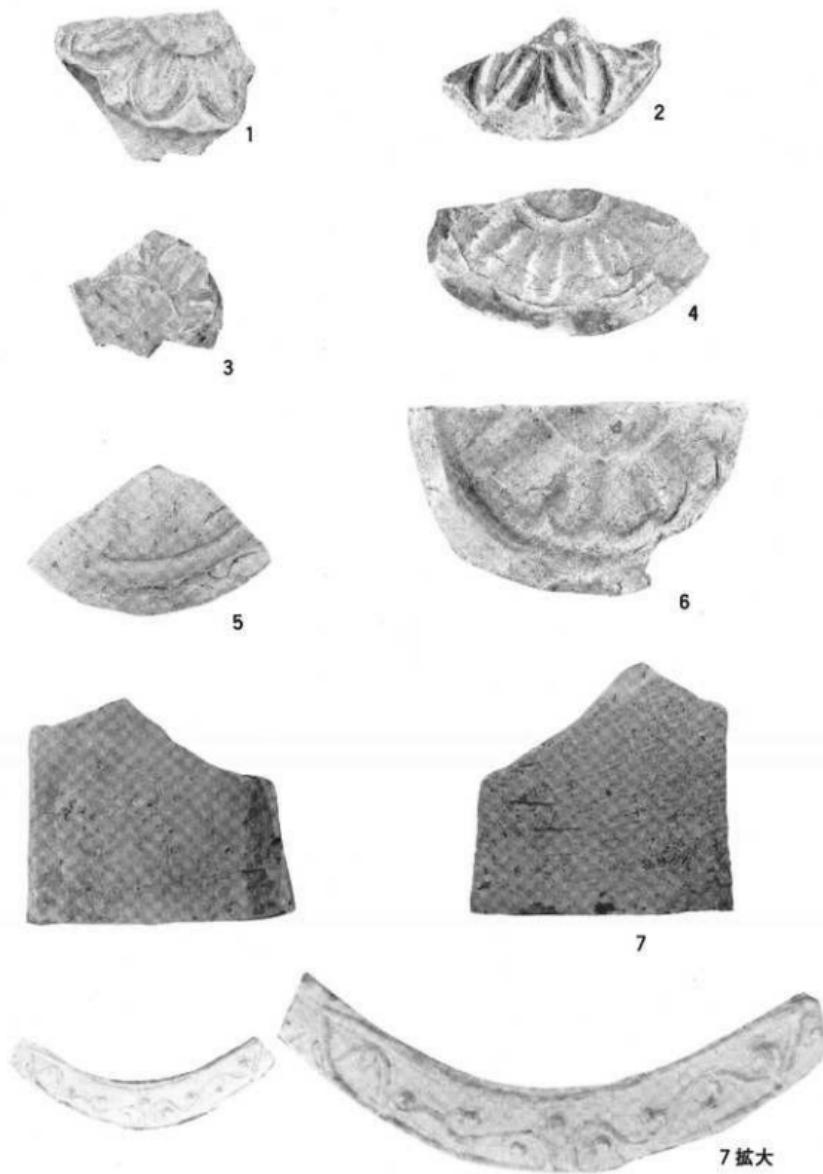


2号土坑(B区2トレ)遺物出土状況

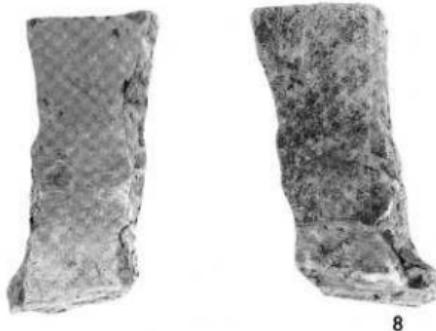


ピット群(C区2トレ)検出状況

図版2



図版 3



8



8 拡大



9



10

図版 4



土 師 器



土師器(高台付椀)



古銭「軋元大寶」



陶 磁 器

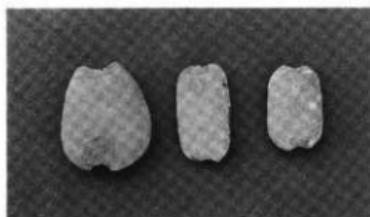


土師器鉢

※「軋元大寶」が入っていたもの



有肩打製石斧



石 錘

報告書抄録

ふりがな	ひのがにくぶんじあと						
書名	日向国分寺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第23集						
編著者名	袁方政幾						
編集機関	西都市教育委員会						
所在地	〒881 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111						
発行年月日	西暦 1996年 3月 29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 番 号					
さいとばらくいせき	みやざきけんいとし 宮崎県西都市 おおおかわ あおこは 大字三宅字四分	1008	32度 5分 50秒	131度 23分 55秒	19950726~ 19951019	450	遺跡所在確認 調査に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
日向国分寺跡	国分寺	奈良~平安	推定金堂堀込地業跡 推定回廊跡 土坑(瓦溜り) 溝状遺構	2基 1条	軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦 上師器杯 土師器高台付輪 須恵器 陶磁器 古錢		主要伽藍配置の一部を確認

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集

日向国分寺跡

平成8年3月29日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 なかむら印刷所

